

津久井やまゆり園事件を考える

津久井やまゆり園

「津久井やまゆり園」の門前に降り立ったときには、藤沢を出てからすでに3時間が経っていた。

津久井は同じ神奈川とは言っても、もっとも遠い場所だ。公共交通機関で行こうと思えば、一度東京の高尾を通らなければならない。

中央線の相模湖駅からさらに1時間に1本しかないバスに乗って、ようやく津久井やまゆり園に着く。

事件からひと月が経っていたけれど、門の前にはまだ献花台が置かれ、たくさんの花束が供えられていた。



津久井やまゆり園

やまゆり園が開設されたのは1964年。今でこそ周辺には多くの家も建っているが、開設当時は人家もまばらな山奥の土地だった。家族が面会に行くのも容易ではなかったはずだ。

こんな人里離れた場所に、なぜ百数十人規模の障害者(※1)施設が作られたのか。それは障害者が社会から「隔離」された存在だったことを意味する。

(※1)「障害とはその人の社会参加を妨げる社会の側の障壁である」とする「社会モデル」の立場から「障がい」ではなく「障害」と表記しています。

事件の本質とは何か

今年の4月1日、障害者差別解消法が施行された。

「障害の有無にかかわらず共に生きる」新しい時代が始まった！多くの障害者や家族、関係者は、希望を持ってこの4月1日を迎えた。

だが、それから4ヶ月も経たない7月26日、この希望は最悪の形で打ち砕かれる。相模原の障害者施設、津久井やまゆり園で起きた障害者殺傷事件だ。

抵抗の困難な重度の障害者ばかり19人が殺害され、職員を含む27人が負傷するという、かつてない凄惨な事件だった。

この事件の残虐性はその殺傷行為だけにあったのではない。容疑者は衆議院議長に宛てた手紙で「障害者は生きていても仕方ない」「安楽死させた方がいい」

と述べ、それを実行に移したと言われている。

いま日本には醜悪なヘイトスピーチが蔓延しているが、今回の事件はそれがさらにエスカレートした「ヘイトクライム(憎悪犯罪)」と言えるかもしれない。

だが、このような障害者に対する差別的な意識は、事件の容疑者ひとりだけのものだろうか。

事件の後、インターネットには「あそこまでやるのは問題だが、彼の主張は正しい」などという書き込みが相次いだ。過去には、重度心身障害者に対して「ああいう人に人格はあるのか」と発言した知事や、「障害者に生きる権利はない」という趣旨の発言を行った教育委員もいた。

やまゆり園事件の本質は、私たちの社会にはまだ根深い障害者に対する差別や偏見があり、この事件はその差別意識が表面に浮上したものの、ということではないのだろうか。

だから多くの障害者は「津久井で起きた事件」ではなく、自分の周囲にも同じような“悪意”が存在しており、いつ自分にもその刃が向けられるかもしれないという恐怖を覚えるのだ。

匿名報道への疑問

それが端的に表れたのは、被害者の匿名報道だ。

事件に際して、神奈川県警は殺害された被害者の氏名を家族の「希望」があったとして、非公開とした。

なぜ、障害者の場合だけ非公開なのだろう。

全国の障害者団体は事件を受けて相次いで抗議声明を発表した。その中で、多くの団体がこの「氏名の非公開」に疑問を呈している。

どんなに重度の障害者であろうと、1人ひとりには生きてきた歴史がある。どんなことが好きだったのか、どんな笑顔で笑ったのか、誰とどんな人生を歩んできたのか。多くの事件報道はその姿を描くことによって、加害者が断ち切ったものが如何にかげがえのないものだったのかを伝えてきたはずだ。

ところが匿名では「19人の障害者」という数字に埋もれて、ひとり人間としての姿が見えてこない。

けっして、家族を責めているのではない。8月6日の毎日新聞は、こんな家族の声を載せている。

「（匿名を希望したことについて）この国には優生思想的な風潮が根強くあり、すべての命は存在するだけで価値があるということが当たり前ではないので、とても公表することはできません」

「事件の加害者と同じ思想を持つ人間がどれだけ潜んでいるのだろうと考えると怖くなります」

匿名を「希望した」のではない。「希望せざるを得なかった」のだ。そしてその背景には、障害者に対する差別や偏見があるのだ。

優生思想

この記事に出てくる「優生思想」とは、どんなことだろう。

優生思想とは、生命の価値に優劣を付け「社会に役に立たない者に金や社会的資源を費やすのは無駄だ」とするものだ。容疑者の主張はまさにこれにあたる。

首都大学東京の木村草太教授はやまゆり園事件にふれて、こんな指摘をしている。

「ハイトスピーチであれば、荒唐無稽で片付けられる。しかし、優生思想は一見“合理性”を持っているように見える。だからやっかいなのだ。」

だが、と教授は続ける。もし社会への有用性だけで「価値のある命」と「価値のない命」が選別されるとしたら、障害者の次にはきっと高齢者や病気の患者、生活困窮者、外国人と、次々に選別の範囲は広がっていくだろう……

単なる杞憂ではない。あまり知られていないが、ナチスドイツはユダヤ人虐殺に先立って、ドイツ国内の



「安楽死」施設に移送される障害者

20万人を越える知的障害者や精神障害者をガス室で殺害している。これはT4計画と呼ばれ、やがてユダヤ人へのホロコーストにつながったと言われている。

優生思想をひとたび認めれば、その範囲は限りなく拡大していく。こんな社会を私たちは望むのだろうか。

施設から地域への流れを止めてはならない

やまゆり園事件はなぜ起きたのか。再発を防ぐには、何が必要なのだろうか。

やまゆり園の設置者である神奈川県は、まず施設の防犯対策の強化に取り組み始めた。それ自体は当然だが、事件に過剰反応するあまり施設に高い壁をつくり、せっかく進んできた「施設から地域へ」の流れを止め

てしまっただけは何もならない。

差別や偏見がなくならない大きな原因のひとつは、社会との「隔離」にあるからだ。

やまゆり園事件にはもうひとつ複雑な問題がある。それは容疑者の側の問題だ。

容疑者の「措置入院（※注2）」の経歴が報道され、あたかも事件との因果関係があるかのような議論が相次いだ。だが今回の事件は捜査が始まったばかりだ。容疑者が精神障害者だったかどうか、措置入院の要件があったかどうか、多くの点で疑問はまだ残っている。

にもかかわらず政府は「措置入院のあり方を検討する」と表明した。また、ある政治家は「措置入院を終えた者にGPSを装着すべきだ」とさえ発言している。

だが全国の障害者団体の声明は、どれひとつとしてそんなことを望んではいない。

“被害者”の立場である身体や知的障害者団体までが、むしろ事件によって精神障害者に対する偏見が助長され、差別が拡大することを懸念している。事件への対策が、「隔離」の拡大であってはならないはずだ。

（※注2）措置入院 精神障害者に「自傷・他害の恐れ」があるときに一時的に精神科病院などに保護する制度。その目的はあくまで「適切な医療の確保及び保護」である。

「共に生きる教育」を

やまゆり園事件の再発はどうすれば防げるか。その答えは、実は私たちの足元にあったのかもしれない。

朝日新聞は神奈川版で「ともに生きる やまゆり園事件から」という特集の連載を始めた。

この中で、事件の再発を防ぐためにいちばん大切なことは「共に学ぶ教育」だと指摘し、その先進的な例として藤沢市の「支援教育」を取り上げた。

8月14日の朝日新聞には、吉田早苗教育長へのインタビューが掲載されている。

「障害のある子と一緒にいるだけで、そうでない子たちは、いろんな子がいるんだと知る。みんな生きているし、学んでいるし、いろんなことが一緒にできるとわかる。どう

すれば手助けができるかも感じるようになる。」

この吉田教育長の言葉に尽きるだろう。

卑劣な犯行に屈することなく、違いを認め合い・共に生きる社会を実現するための歩みが続けよう。



朝日新聞 2016.8.14